

黙示録の記録

第9章

悪魔的災害

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

- 第5章 小羊が相応しい
- 第6章 創造主の大いなる怒りの日
- 第7章 大患難における聖徒たち
- 第8章 外からの攻撃を受ける地球
- 第9章 悪魔的災害

第9章 悪魔的災害

この時まで、地球を激しく揺り動かした大荒廃は自然界にだけ向けられており、間接的にだけ人にも影響を及ぼしていました。最初のラツパの裁きのもとで、木や青草は雹と火と血によって壊滅的打撃を受けました。次に、海の生き物と海岸に係留されていた舟が、宇宙空間からの火の燃えている大きな山のようなものが海に投げ込まれて破壊されました。第三のラツパが吹き鳴らされた時、空からの他の誘導弾（ミサイル）が世界の水を汚染しました。それから、太陽や星のエネルギーを発生させる過程がしばし低下しました。これらの裁きすべてによって、突然人の心に恐怖が襲い、多くの人を間接的に苦痛と死に追いやりましたが、最も多くの人々は、比較的わずかな受難で生き延びたのです。

二、三日後、太陽は通常の光を放ち始め、青草は伸び始め、水の供給も、すばやく飲用に供せられました。そして、人々は各自の関心事に戻り、またも創造主の声を無視し始めました。けれども、次のラツパの音が

鳴り響いた時、——天空を飛び回っていた天使の伝令によって告げられたこと——人々は、一人一人各自が、裁きのひどい痛みを直接経験するでしょう。

地獄の扉を開く

長い間、サタンと墮落天使の軍勢は人類を憎んでいました。事実、人は彼らが墮落する原因そのものであったし、彼らが知っている恐ろしい運命が彼らを待っているからです。

サタンはかつてすべての天使たちの内で最も位の高い天使で、「守護する油注がれたケルブ」〔エゼキエル書28章14節〕、「暁の子」〔イザヤ書14章12節〕でした。サタンは「知恵に満ち、美のきわみ」〔エゼキエル書28章12節〕であり、それは、彼を造られた創造主の御座そのものでこの上ない特権の立場にありました。けれども、サタンは創造主のように永遠の存在ではなく、実際には創造されてきました〔エゼキエル書28章15節〕。事実、サタンとサタンの監督下にあるすべての天使の支配権と力は、助ける霊として特別に奉仕するために創造され「救いの相続者となる人々に仕えるため」〔ヘブル人への手紙1章14節〕に派遣されてきました。

天使たちは人の創造に先立って、おそらく、創造の第一日には創造されてきました。創造主が第六日に人を創造される時に、すぐに奉仕が出来るようになります。人は、天使とは異なって、自分と同じ種族を再生産する能力を持って、創造主のかたちそのものに創られるはずでした。天使たちの数は数え切れないほどですが〔ヘブル人への手紙12章22節〕、天使の数は決まっています。限りがあります。それに対して、人の場合このような限界はなかったのです。

これらの理由であろうと、他の理由であろうと、サタンは、彼が創造された地位に満足していませんでした。サタンは神の星々の上に自分の地位を置き〔イザヤ書14章13節〕、「いと高き方」のようになりたいと思いましたが〔イザヤ書14章14節〕。聖書で、「星々」という用語はしばしば「天使たち」と同義語と見做されています〔ヨブ記38章7節〕。しかし、サタンはもっと高い王座を求め、彼とともに創造主に反逆するために天使たちの三分の一を扇動することができました〔黙示録12章3、4、7節〕。

勿論、サタンとその軍勢は、創造主に打ち勝つことはできず、彼らは地になげ落とされました〔エゼキエル書28章17節、黙示録12章9節〕。彼らはこのことを通して従順（服従）を学ぶべきでしたが、不幸にも、彼らはそうしないで、有史以来、反逆し続けています。「知恵に満ちた」者としてのこのような分別のない行為に対する唯一の理論的説明は、サタンは、創造主は結局彼の創造者ではなく、それ故、創造主に反逆しうまくすると上に立つことが出来るかも知れないと、奇妙な結論を下しているということです。永遠に宇宙は進化するという悲劇的な妄想は、サタン自身の心に最初に浮かんだ表現であったに違いなく、実際に創造主に勝ると言うばけがた仮定を合理化しようと企てているのです。

しかし、宇宙にある創造された無数の天体の中から、なぜサタンは地に追放されたのでしょうか。明らかに、地は人の住みかであったので、そして、サタンは人に仕えるという彼の使命に謀反を起こしたので、サタンは人を試すことを許されました。こうして、人も創造主に反逆するかどうかを決めているのです。

そして、人は反逆し、同じサタンの欺瞞を信じ、創造主が真の造り主であるかを疑ったのです。サタンは「あなたは神のようになれる」と言ったのです。「創造主が主張しているように、彼だけがすべてのものの創造主でもないし支配者でもない。創造主は私たちと同じような存在だ。したがって、我々は創造主と同じように

なれる。我々は皆永遠の宇宙にある物質からの自然の過程で形作られた。それゆえ、創造主の専制的支配に反抗する私の戦闘に一緒に加わらないか。子をもうけるあなたの能力を持って、我々は力ある大群を間もなく創りだすことができる。そして、私に従う天使仲間とともに創造主に忠誠な天使たちを追い出し、我々は皆神々になろう」と。

しかし、創造主はサタンの企てを阻まれました。創造主はアダムに「塵に帰れ」と言われ、サタンには「女の末が永遠に汝を打ち砕く」と言われました。もう一度、人に対する創造主の計画へのサタンの妨害は、創造主からサタンへ下される恐ろしい裁きへと導かれました。

なお、もう一つの機会がありました。人が地に増え広がった時、サタンは、創造主の人に対する目的が挫かれてしまうほどに人類すべてを墮落させようと試みました。

神の子たちは女のところに入りました。そして女たちは彼らのために力ある人を生んだ〔創世記6章2〜4節〕。創造主を敬わない人々は、男女ともに容易に悪魔の餌食になりその所有となり、それによって、サタンの霊は、またこのようにして生まれた実を支配した。そして、大きさと邪悪さにおいて、彼らは巨人になっていった。明らかに、サタンは、またも、天にある忠実な軍勢を激しく攻撃するために、墮落した天使たち（悪霊たち）が所有し、支配する強力な人の軍隊を集め続けました。もしこれが成功しなくても、地上にいるすべての肉なるものを墮落させることによって、サタンは少なくとも人に対する創造主の目的を妨げることができずでした。しかし、サタンはまたもや失敗しました。「ノアは主の前に恵みを得た」、他の者すべてが清める洪水の水で滅ぼされたけれど、約束の子孫の家系は保たれました。悪霊に憑かれた人々の体は洪水の水を受けた大海原の水で滅び、彼らの失われた魂はハデスに閉じ込められました。このさらなる反逆の行為に加わっ

ていた天使たちは、特別の裁きを受けました。「主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使いたちを、大いなる日の裁きのために、永久にしばらくつけたまま、暗やみの中に閉じ込めておかれた。」〔ユダの手紙6節〕。「創造主は、罪を犯した御使いたちを許しておかないで、彼らを下界（ギリシヤ語 Tartarus、最も低い地獄）におとしいれ、さばきの時まで暗やみの穴に閉じ込めておかれた」〔エペテロの手紙2章4節〕。サタンの軍勢はこのように重大な減少を来しました。それでもサタンはなお悪しき大軍を支配しています。「もろもろの支配と権威、・・やみの世の主権者、・・天上にいる悪の霊」〔エペソ人への手紙6章12節〕。

これらの敗北がありながらも、今のサタンの人類に対する憎しみが言語に絶するほどひどいのは大して不思議ではありません。創造主が許しさえすれば、サタンは最後の一人にいたるまで苦しめ滅ぼすが、それを阻止する大いなる方、聖霊は、サタンに許容範囲内一杯での活動だけを許しています。「サタンの使い」が人を打つ〔エペソ人への手紙12章7節〕、悪霊が人に憑りつき滅ぼそうとするし〔マルコによる福音書9章17〜27節〕、サタン自身は「ほえたけるししのように」〔エペテロの手紙5章8節〕サタンが可能な人々をむさぼり食らいます。それでもなお、創造主は恵みの内に再三サタンの企みに対し恵みと癒しと保護を与え、それにつれ、サタンとその配下の天使たちの人に対する憎しみはますます激しさを増します。

けれども、最後にその監禁は緩められ、弱くなり、闇の軍勢は、彼らの欲求不満と怒りの長年の原因であった苦痛の種から解き放たれます。しかし、これでさえサタンの勝利ではなく、創造主は、ただそれすら反逆する人々に対する裁きの手段の一つとして用いるのです。

を見た。その星には底しれぬ穴を開くかぎが与えられた。

「底しれぬ穴」は、地球の内部にある深みで「深い淵の穴」（ギリシャ語アブソス abyssos）です。ハデスはまた地球の中心にある大きな穴であることを表しているのです。深い淵の穴はハデスか直接ハデスとつながっている可能性があります。ハデスには多くの異なった牢があるようです。タルタルスは二回落ちた天使たちが閉じ込められている所で、これらのうちの一つです。十字架以前、失われた者の霊と救われた者の霊が大きな淵で分けられていました「ルカによる福音書16章26節」。「深淵の穴」は、多分、ハデスのなお別の区画で、そこに、恐ろしい顔の生き物の一群が解き放たれるのを待ちながら留め置かれています。悪霊のレギオンは、キリストに彼らを深淵に送り込まないように願って、豚の群れに入ること許されました「ルカによる福音書8章31節」。多分、これら悪霊的存在は、創世記6章とユダの手紙6節で自らのおるべき所を捨てた天使たちでもあり得たでしょう。そして、彼らが幽閉されていることを非常に憤っており、彼らは、彼らをこの様に不幸な環境に落としかけた究極の原因が人にあると見做して、憤りに燃え人に復讐したいと思っています。

そこで、第五の天使の裁きは、以前のすべてよりもより恐ろしいもので、なお地上にいる人々を拷問にかけるためにこれらの悪霊が解き放たれることも含まれます。ラッパが鳴ると、キリストによってだけ、彼ら捕らわれているものを解き放つために牢獄のカギがはずされます。

では、この天からの怪しげな星は何者でしょうか。それは、前の二つのラッパの時のように空から落ちてくる自然界にある星でないことは「彼にかぎが与えられた」の文面から明らかです。サタン、明けの明星（またの名ルシファー）暁の子「イザヤ書14章12節」はずつと前、不正が彼に見出されるや否や天から投げ出されていた「ゼキエル書28章15節」。主イエスはこの場面を弟子たちに「イエスは言われた。「私が見ていると、サタンが、いな

ずまのように天から落ちました」「新改訳」「ルカによる福音書10章18節」と述べています。

それが（欽定訳聖書にある「落ちる」の代わりに）「落下した」と訳されるべきであるかぎは動詞の完了時制にあるのです。（完了時制）は過去において完了した行為についての言及です。ヨハネは、落ちてくる星ではなく落ちた星を見たのです。サタンはずつと前に天から落ちていました。しかし、彼は明らかに御座に着かれる方にかぎを受け取るために近づくことを許された。（キリストが黙示録1章18節で主張しておられるように、キリストだけが今死とハデスのカギすべてを持っておられる。そして、このようなカギは何であれキリストから得なければなりません）。

この点に関してだれも絶対確実なことは言い得ないけれど、サタンが事実この落ちた星だというのが、確かにもつともらしいのです。サタンが実際に限られた場面においてですが、創造主の面前に近づくことのできることは、ヨブ記1章と2章から明らかです。けれども、サタンがこのような謁見を認められるのは、人を訴える告発者としてだけで、事実、サタンという名そのものは「敵」を意味します。サタンは「兄弟たちの告発者」で、「日夜、創造主の前に信者たちを訴え」ているのです「黙示録12章10節」。サタンは創造主の正義の法廷で私たちの敵ですが、イエス・キリストは私たちの弁護人「1ヨハネの手紙2章2節」であり、サタンの告訴のどれ一つも小羊の流された血潮の効果に反抗できないのです。

サタンは天地におけるこれらの進行状態を、深い失望をもって見守らなくてはなりません。キリストが死者を彼らの墓から呼び出だし生きている信者を天にあるご自身の御座に携えあげる時、どうする事も出来ずに傍観しているサタンの激しい怒りは、増し加わります。サタンは今なお、かなりの程度地上にある諸民族を操ることができるでしょう。しかし、サタンは自分の時がほぼ過ぎ去り、大いなる怒りに会うことを知る

でしょう【黙示録12章12節】。サタンはまた患難期の最初の数カ月を通して大群衆の回心を苛立って見ており、最後にサタンに大いなる穴のカギをキリストが与える時、実際に絶望するでしょう。

黙示録9章2節 その星が、底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。

サタンが直ちにカギを外す底知れぬ穴は、文字どおりに「深淵の穴」です。「深淵」という言葉は「底深さのない」という語根の意味に由来しており、したがって、適切な訳は「底なし」です。それは明らかに地球の中心そのもので、したがって実際に底がないのです。あらゆる方向にある境界はすべて天井です。何人も下に行くことはできません。ハデスのこの深淵の穴は、明らかにハデスにあつて、閉じ込める部屋の一つであり、サタンが実際にかぎを受けるのはこの一つだけです。

しかし、戸をあけると驚くべき現象が起こります。地下の煙の大波が地上に放出されます。そして、煙が空気を暗くするまで全世界に広がり、太陽の光さえ暗くなつていきます。このことは地球のどこかに大きな排気孔があつて、そこに導く開口部があるに違いないことを指し示します。そして地球の表面から、ハデスと穴の途中にある地殻を通過し、マントル、中心部へと続いています。人は決してこの排気孔を見出すことは出来なかつた。なぜならその出口は明らかに閉鎖されているから、しかし、このことはそれが存在しないことを意味しません。排気口は創造主によって「昔から定められた」ものである。その壁は内からも外からも攻略できない、創造主によってあらゆる自然的、超自然的な破壊力に対しても耐えられるように設計されていたのです。しかし、カギが最後にまわされた時、多分地球の内部の熱と圧力によって押し出された大きな煙のうねりが地表に向かって流れだし、ついに地球の表面に出るのです。

地獄からの飛びかけるサンリ

黙示録9章3節 その煙の中から、イナゴが地上に出てきた。彼らには、地のサンリの持つような力が与えられた。

聖書で煙が見られる最初の記述は創世記19章28節です。ここでは、ソドムとゴモラを滅ぼすために創造主が天から火を送られた時、アブラハムは、遠くから恐ろしい大量虐殺の状況を注視して、土地全体が燃えていて、煙が「かまどの煙」のように立ち登っているように思われるのを見ていました。今の時代がまさに終わろうとしているこの時、再び、煙が巨大な炉の煙のように登って行き、世界中に広がります。あたかもこれが十分に恐れるに価しないかのように、煙の中から地に住む人々は、イナゴのように飛んでいる恐ろしい生き物が次から次へと波のように現れてくるのを見るのです。ヨハネは天上にある有利な場所から私たちのためにその光景を記述した人であり、彼の記述は驚くべきものです。

今まで地上でこのような生き物を見たことは誰もありません。けれど、預言者ヨエルは明らかに幻で、これらの生物を見ていました【ヨエル書1章16節・2章25節】。ヨハネは彼らをイナゴと呼ばなければなりません。なぜなら、ヨハネの語彙の中にはほかに比較できる生き物はなかつたからです。しかし、彼らは昆虫学的意味でのイナゴではなかつた。彼らは群がって行動し、イナゴのように空を暗くし、イナゴのように地球の中から舞いあがり、イナゴのように過ぎ去ったあとを悲惨な状態にしました。しかも、彼らは地獄そのものから出

てきました。地球の中心はイナゴの幼虫の繁殖所ではあり得ません。そして、奇妙な外観とこれらイナゴのように群がって奇妙な動きをすることから見て、彼らは悪魔的性格を示しています。

これらの生物が人に対する報復を晴らすのにどれくらいの時がかかるかは明らかにされていません。けれども、恐らく彼らの意地の悪い苦痛をすべての人に与えるのに十分な長さであったでしょう。なぜなら、通常のイナゴとは似ていないで、彼らは、人に肉体的に精神的に苦痛を与える能力を受け取っていた。苦痛は非常にひどく、サソリにかまれたのと比べることができるほどであった。サソリには多くの種類があつて、ある種は他の種より有毒です。しかし、中近東の砂漠にいるサソリは、人が知っている最もひどい苦痛を与えると言われています。

黙示録の歴史的註解者は他の見解をもつてここに記録されているように、これらのイナゴを大いにもてあそんできました。彼らはイナゴを、サラセン人の軍隊から教会の中にある偽りの教師の害にいたるすべてを想像していました。このような解釈は、黙示録は私たちに教会史を告げるために書かれたものではなかったと証明するのに役立つだけです。彼らは新しく形造られた生き物ではあり得ません。たとえ創造主がお持ちでも、創造主は良くない生き物を造られないし〔創世記1章31節〕、裁き的手段としてさえ造られません。たとい創造主におできになったとしても、創造主は彼らをサタンの管轄権の下に置かれなかつたはずで、サタンは彼らを創造されなかつたはずで、なぜならサタンは、創造主ではないので、何物をも創造できません。彼らは、彼らが出てきた所とその能力からみて、明らかに本当の昆虫ではないのです。

地獄からのイナゴは事実悪魔の霊だと結論づけざるを得ないように思われます。長い間、深淵の穴に閉じ込められていたが今や少しの間解き放たれた。たぶん、人々は彼らが創造主の大いなる救いを拒否し続けることを選択することによる恐るべき結果を理解するはずで、人々は今迄にキリストは天に居られ、携挙された聖徒は天にいる事を確かに知ったのです。彼らは聖なる天使たちが天を駆け巡るのを見てさえおり、そして、彼らは小羊の怒りが地に訪れているのを知ったのです。それでも尚、彼らは創造主に対する憎しみを固執して、その代わりに、サタンを選んでいきます。そこで、創造主は将来火の池で共に過ごす居住者との直接の交わりを少しばかり経験するのを許されることでしょう。

これらのイナゴが創世記6章の墮落した神の子たちまたは、創造主が許された境界を越えてさまよい出たため閉じ込められた隠し場にいる悪霊たちかは示されていません。もし前者なら、彼らはキリストが十字架の死後ハデスに下った時キリストの勝利宣言をすでに聞いていました。そこで、キリストは「3章19節その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行つてみよことを宣べられたのです。3章20節昔、ノアの時代に、・・・創造主が忍耐して待つておられたときに、従わなかつた霊たちのことです。」〔1ペテロの手紙3章19-20節〕。キリストが実際にこの同じ深淵に下ったことは、明らかにローマ人への手紙書10章7節に暗に示されています。そこでは、パウロが『誰が底知れぬところ（深淵）に下るであろうか』（それは、キリストを死人の中から引き上げること）』であると反問しています。もちろん、キリストだけがこれをなし得るのであり、キリストが為したことは、囚われの聖徒たちを解き放ち、閉じ込められている反逆した天使たちにキリストの勝利布告し、ハデスと死のカギすべてをもつことを明確に返答したのです。

彼らの牢獄から大波のように押し出された時、悪意に満ちたこれら動き回る大群はおそらく、このことすべてを知っていました。彼らはサタンと共に彼らを悩ましている聖なる方に何とかして勝利することを願っていたが、ともかく、創造主が許される範囲で、人を苦しめ続けることによって長く閉じ込められていた怒

りをぶちまけるはけ口となる機会を熱心につかんだ。大昔彼らがしたように、人に憑りついて彼らを支配することが、もう一度できるかどうか。彼らは少なくとも人の体を悩ませる事が出来たし、恐らく、彼らをキリストが救う前に滅ぼすことさえ出来たのです。

黙示録9章4節　そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神(創造主)の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。

この命令(指令)は、これらは人が今まで見たことのあるどんな種類のイナゴでもないことをより明らかにしています。通常のイナゴが荒らすのは明確に樹木、青草そして青物ですが、これらのイナゴはこのようなものを注意深く避けなくてはなりません。青草と樹木の三分の一は既に最初のラッパの裁きによって焼き尽くされてきました。そして、地上の植物はそれが再成長するために当分危害を加えないでおくべきでした。イナゴの使命は単純であった。彼らは人を傷つけるためだけであったし、この割り当てられた仕事は、彼らが喜んで引き受けるものであった。

けれども、彼らが最も滅ぼしたいと切望している人々は、創造主を証している僕たちで、彼らに触れることを禁じられていた。確かに、この禁止は、彼らをとさら激怒させた。しかし、彼らは、彼らの行動に創造主が設けられた境界に背くことの愚かさを長い厳しい経験から知っていたのです。それで、彼らは彼らの攻撃に当たって救われた者と救われない者とを注意深く見分けました。

創造主の一四万四千人の特別なしもべは、この目的のためにある方法で特別な目印がつけられていた「黙示録7章」。しかし、彼らの証を通してキリストに獲得された大群衆はどうか。創造主がこれらの人々のいずれをもひどく傷つけることを許されるとは思われません。これらの後者は新しい「携拳」で天にたづさえ挙げられるのか、さもないと、彼らはこの時まで皆殉教の死を遂げていた可能性があります。さらにより可能性のあることは、聖書では述べていませんが、彼らはまた彼らの信仰によってそのように印せられているのかもしれない。

黙示録9章5節　しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。

これら悪霊たちには、人を苦しめる事とこの目的のために人をひどく苦しめるサソリのようなとげ(毒針)を刺す能力が与えられていた。しかし、彼らにさらに、この針で決して人を一人も殺してはいけないということ(すなわち、彼らに与えられた1つの命令)であった。これは確かにもう1つの重大な制限であったが、彼らは彼らの権限を越えて行動する力はなかった。彼らは創造主によって殺さずに苦しめるだけの毒を注入するように強いられていたのか。または、彼らの毒は創造主によってそのように合成されていたのかのいずれかです。この事については告げられていません。

さらに、彼らに与えられた自由は、五か月の制限付きであった。おそらく、五か月の満期になった時、再び彼らの地の深いところにある牢獄に掃き戻され、彼らは最後の裁きまで監禁されるはずで、五か月(一五〇日)は、ノアの時代に洪水の水かさが増し加わった期間で意味深長です「創世記8章1節」。人々はかつて苦しみに会い、洪水の前の方の五か月の裁きで皆死にました。いまも、ノアの時代のように人々はまたもや五か月苦しみにあいますが、誰も死にません。両方ともに、彼らが苦しみに遭う動因は、これらの創造主に反逆し

た子らであった。前の時、彼らは確かに光の天使として現れた「エロリント人への手紙11章14節」。しかし今度は、残忍な行為のセールスマン、暗闇のイナゴたち、悩ますものであるサソリ、偽りで人をだます代わりに彼らの針で人を刺すものとして彼らの特性によりふさわしい現れ方で出てきました。

黙示録9章6節 その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。

五か月は、人にとってこのおぞましい裁きを経験するのに十分でしょう。彼らは山に、海に、砂漠に逃げます。そこで、彼らは窓にかんぬきを差し、地下室におそれて縮こまります。しかし、逃げ場はありません。これは霊的存在であり、固い壁でさえ彼らが近づけないようにはできないのです。彼らは激怒して、彼らは地上に群がり、要塞を通り抜け、彼らが逃げ込むどこにでも行き人々に襲いかかり、誰ひとり逃れられません。災害は非常に恐ろしく、痛みは非常にものすごいので、人々は完全に絶望します。墓が彼らの苦しみを解き放してくれるかもしれないという儂い望みをもって死をさえ求めるのです。

たとえ地獄が彼らを待つっており、苦しめているこれらの生き物自体が地獄にもいることを彼らがこれまでの経験で確かに知っていたとしてもです。しかし、彼らは自殺さえできないのです。銃は不発になり、ナイフは手から滑り落ちる、毒物は効力を失う、人々は無力になり自らを傷つけますが、どういうわけか自殺さえ出来ないのです。そして、彼らが再び死を試みる前に、彼らはこれらいたるところに存在し追いかけてくるイナゴに似た悪霊の他の群れから急に逃れなければならないのです。

これら苦しめられた人々の幾人かが遂に泣き崩れ、ついに悔い改め、創造主に許しと救いを求めることを誰でも願うのです。創造主は、恐らく、彼らが悔い改めることをも長く耐え忍ばれたのです。この期待こそ「ペテロの手紙3章9節」この言語に絶する五か月の間彼らに死を許さなかつた理由なのです。

けれども、おそらくサタン、あの年老いた蛇、すべての生物の中で最も陰険な者は、自分自身への回心者を得るためにこの裁きを用います。サタンが自分の目的のために人をだませない時、サタンは、彼らを怯えさせて従わせるでしょう。この時までには、人々は皆、サタンはキリストと同様に実在の存在であることに気付くようになり、彼らはサタンと救い主との間の宇宙的闘争の真の特徴は何かということを理解します。キリストは裁きを通してもお人々に悔い改めるように招いています。サタンは、すぐやってくるハルマゲドンの戦いで彼の軍隊に加わる彼に完全に委ねる活動的な新兵を求めています。

年老いた『光の天使』の決まりきつたやり方でだますための時間はもうありません。何世紀にもわたる、特に、精霊崇拜の宗教で、人々は、彼らが単にぼんやり知っている遠く離れた至高の創造主に奉仕するよりも彼らの生活にたかる霊共をなだめるために手っ取り早いことを見出していました。これはこの際のサタンの戦略と言つてよいのかもありません。悪魔的イナゴは、もし彼らが心をサタンに売り渡すなら、彼らの犠牲者に干渉しないと約束をすることもしません。このような計略がとられるか、または、どうしたらこの計略がうまくいくかは、明らかに、推測の域を出ません。

けれども、今日人々がサタンの侵入のために準備しつつあるというのがまさに確からしく思われます。悪霊の話題を取り扱った映画、テレビのプログラムと書籍の氾濫は、次代のオカルト宗教とその実践の急速な成長に伴い、すべては、人をサタンとその悪霊を信じる広く行き渡った信仰の状態に人々を確かに調整しつつあるのです。なおその上に、どの一つも人をキリストに避難するように駆り立てはしないのです。人は最

初にそれを思いみるかもしれないませんが、むしろ、ぞつとするような恐怖の強迫観念を高め、彼らをキリストから遠ざけます。悪霊たちを恐れる心が大勢の男女をサタンの奴隷に駆り立てるのは、もはや無理とは思われません。

黙示録9章7節 そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。頭に金の冠のよつなものを着け、顔は人間の顔のようであった。

解釈に当たって、歴史学派と未来学派の多くの人々でさえ、これらのイナゴと彼らの顕著な容貌が何かの判定に多くの奇妙で不思議な手段を作り出しました。これらの『馬』と『冠』と『人間の顔』は何を表しているのでしょうか。解説者たちは、ここで、これらの象徴に対する可能性のある意味を捜し求めています。

しかし、これらは象徴として書かれたものではありません。本文は、イナゴが人の顔と頭に金の冠を付けた馬であったと言ってはいません。このような記述は実際に隠された意味を探る手始めなのかもしれません。なぜならそれを文字通りにとる事は恐らく出来ないからです。けれど、ヨハネは見たままを描いているのであり、読者に驚くべき光景をおおよそ伝える事の出来ることばを探しているようです。悪霊イナゴは軍馬に似た形をしています。すなわち、彼らの頭には王冠のように見える付加物があり、彼らの顔は人の顔のようであり、こうして彼らの悪い行為にある知性と目的を表しています。これらは単にこれまで知られていないある飼育場から群がり出てきた奇妙な新しい種類の昆虫ではなく、地獄からの悪霊たちです。

預言者ヨエルは、ずっと前にかみ食らうイナゴの幻を見た「ヨエル1章4節」。かみつくイナゴは実は、イナゴの現実の災害でヨエルの時代に部分的に成就していました。けれども、多くの旧約聖書にある預言的内容をもつ多くの幻は、最近成就したものとずっと昔に成就したとと混じり合っていて、ヨエルの幻は焦点が少しずつ変わったと言ってもよいかもしれません。そして、最後に、ここでヨハネにみられた遙か後に侵入したイナゴで終わりになります。ヨエルの恐ろしい警告に注意して下さい。

「これは暗く、薄暗い日、雲の群がるまっくらな日である。多くの強い民が／暗やみのようにもろもろの山をおおう。このようなことは昔からあったことがなく、後の代々の年にも再び起ることがないであろう。そのかたちは馬のかたちのようにであり、その走ることは軍馬のようである。」「ヨエル2章2節、4節口語訳」

悪魔的侵入者はイナゴのように飛ぶことが出来るし、馬のように走ることができ、サソリのように刺す。このような生物が生みだす恐怖を容易に想像できます。人が死を求めるのは不思議ではありません。

黙示録9章8節 また女の髪のような毛があり、歯は、ししの歯のようであった。

ヨハネは驚くべき恐ろしい言葉による描写を続けています。その生き物は人の様な顔をしており女の様な髪の毛を持っていた。(もしこれがすべてであったなら、昨今流行している男の人の髪形と考えたい気持ちにさせられるかもしれないが、描写の残りはこれ以上のことを物語っている)。明らかに、彼らは彼らの尾の針と同様に歯で引き裂くことが出来た。また、ヨエルは、二重の視力でこれらのライオンに似た歯について書き留めました。「一つの国民がわたしの国に攻めのぼってきた。その勢いは強く、その数は計られず、その歯はししの歯のようで、雌じしのきばをもっている。」「ヨエル書2章6節口語訳」

黙示録9章9節 また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、

戦いに馳せつけるとき響きのようであった。

また、ヨハネの生き生きとした描写とヨエルの描写を比べて下さい。「山の頂でとびおどる音は、戦車のどろくようである。また刈り株を焼く火の炎の音のようであり、戦いの備えをした強い軍隊のようである。」「ヨエル2章5節口語訳」軍隊は、武器に対し無敵で免疫があります。「彼らは武器の中にとびこんでも、身をそこなわない。」「ヨエル2章8節口語訳」

前に強調したように、どんなに獐猛でも単なる昆虫と取ることはできません。また、過去のまたは未来の何か人からなる軍隊の比喩的表現でもありえないのです。彼らはハデスにある深い洞窟から解き放たれた悪霊の群れに過ぎません。まだその上に、何かおぞましいイナゴに似た、馬に似た、獅子に似た、サソリに似た、女の人に似た、男の人に似た形をとっていたのです。

これがただ一つの可能性のある意味に思われるけれども（ヨハネはただ彼が見たままを書き記している）、気軽にごのような意味に当てはめることはできません。これら奇妙な身体は、実際の身体でしょうか、または幽霊（霊体）でしょうか。もし催眠または麻薬または魔術によって彼らの犠牲者の心によって引き出された単なる幽霊なら、彼らがどうして苦痛を与える針で肉体を刺すことが出来るのでしょうか。しかし、もし彼らが本当の毒液を持つ袋を備えた真の肉体なら、どこで創られたのでしょうか。創造主だけが創造できます。サタンでさえ悪霊たちの住む生きている身体を造ることは出来ないし、確かに創造主は便宜をはかってサタンの願いを聞き入れることはしません。

では、彼は何でしょう。結局、この襲来は実に創造主の熟慮した上での邪悪で、反逆する人々に裁きとして着手されたもので、創造主につく聖なる天使によるラッパの響きによって呼び出されたのです。サタンは自分の目的のためにそれを変え、多くの生贄を得るかも知れないが、創造主はいつものように無効にします。これらの邪悪な霊が自分の身体を持ちたいとの長い間の願いを満足させながら、創造主が彼らのために身体を創造されたと結論付けるほかの代案はないように思われます。その肉体は、悪魔的容貌で彼ら悪霊の住ましいの特質にふさわしい身体です。

黙示録9章10節 そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五か月間人間に害を加える力があつた。

これらの生き物の奇妙な身体は、実際にこの特別な裁きのために創造主によって特に創造されたとするば、ほかの特別な一つの属性を容易に理解できます。本物のサソリで用いられると同様に彼らの尻尾から注入される毒液はものすごい痛みを惹起するが決して致命的ではなかったのです。彼らは人を傷つけますが殺しはしません。

さらに、その災害は五か月続きますが、それ以上は続きません。グロテスクな刺すイナゴは出現した時と同じように突然消え去ります。そして、幾人かの人が悔い改めるとの希望をもって、なお短い小康状態を与えられます。けれども、古代エジプトの災禍の場合と同様に、悪霊が去って、恐らく彼らの地獄の穴に帰させられた時、このことは多くの人々の項（うなじ）を今までよりもさらに固くしたに過ぎません。

イエス・キリストによって二千匹の豚の豚の身体に入ること許された悪霊レギオンが「マルコによる福音書5章13節」、彼らがとりついた動物を殺していったように、聖なる天使が身体を用いる彼らの権威を終わらせるや否や、これらの邪悪な霊は、彼らが利用した巨大な昆虫の醜悪な身体を確かに殺します。おそらく、世界の科学者

たちは、侵入してきた生物をうまく対処するために根絶する殺虫剤を死に物狂いになって開発しようとしていたが、たとえどんなに努力しても、彼らの時が終わるまで何物も役に立たなかった。それから、彼らが突然現れたように、彼らの飛びかける翼のある攻撃は止み、彼らの死体は地表に散らばった。ヨエルは恐らくその結果に言及している。「その悪臭が立ち上り、その腐ったにおいが立ち上る。主が大いなることをしたからだ。」〔新改訳／ヨエル書2章20節〕

黙示録9章11節 彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル人への手紙語でアバドンといい、ギリシャ語でアポリュオンという。

悪霊イナゴの侵入軍の身体は滅びるかも知れませんが、霊自体は、「悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火」〔マタイ25章41節〕に住むように定められています。そこで、彼らはその時まで深淵に群れをなして戻らなくてはなりません。墮落天使のこの特殊な群れはアバドンまたの名アポリュオンと呼ばれる力ある天使の指揮下にあるのです（共に、ヘブル人への手紙語とギリシャ語の名で、「破壊者」を意味しています）。多くの人は彼はサタン自身だと考えているが、サタンはピラミッド型の支配権と権力の階級制度を支配していることを思い出されなくてはなりません〔エペソ人への手紙6章12節、コロサイ人への手紙2章15節〕。現在のサタンは、ハデスではなくて、天にあつて支配しているのです。サタンは「空中の権を持つ君」〔エペソ人への手紙2章2節〕です。

一方アバドンは、すべての邪悪な霊の団を指揮下に置き、ノアの日にすべての人類を滅ぼそうとした生意気な企て以来、明らかに深淵の牢獄に閉じ込められています。この節で用いられた言い回しは、一節にあるように「深淵の穴」ではなくて単に「深淵」または「底のないところ」で、そこが明らかにアバドンの住

みかです。

彼と彼の手下の天使たちは大洪水の直後、ヨブ記の時代に既にハデスに監禁されていたことをヨブ記26章6節は暗に示しています。地獄「すなわちハデス」は、創造主の前に裸であり、その滅びの淵『すなわちアバドン』も覆われないのです。アバドンは明らかに既に牢にいてこれら墮落した霊たち〔エペテロの手紙2章4節、IIペテロの手紙2章4節〕の頭ですが、まさに、創造主がそう命じた時に、覆っていた蓋が取り除けられるのです。脚注：アバドン：地獄の大魔王でその幽閉の所は、地獄の深淵にあるI区画に閉じ込められている。

ユーフラテスの天使たち

黙示録9章12節 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。

第四のラツパの後、飛びかける天使は三つの「恐るべきこと」が来つつあることを警告していました。最初の恐るべきことは五か月にわたって地上の広範を襲っていた実に恐るべき経験でした。そして、いまや悪魔のようなサソリのひどく恐ろしい群れは死に過ぎ去りました。天からの大きな声―おそらく同じ飛びかける天使からでしょう―まさに来ようとしている二つの恐るべきこと、そして、これらはさらに一層ひどいことでしょう。第一の災いは痛さでしたが、第二の災いは死を招くものになるでしょう。

黙示録9章13節 第六の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、私は神（創造主）の御前にある金の祭

壇の四隅から出る声を聞いた。

第二の恐るべきことは第六のラツパです。ラツパが鳴るたびに、それに続く裁きは前の裁きよりさらに厳しいものとなります。ずっと前、イザヤ書は「あなたのさばきが地に行われるとき、世に住む者は正義を学ぶからである。」^{イザヤ書26章9節「口語訳」}と予言していました。それゆえ、確かに次々とくる裁きは、学ぶ姿勢のある僅かな者に覆いが取り除けられますが、変わらない残りの者はなおさら頑なになり、こうして、各々の裁きの到来で厳しさが増し加えられなくてはなりません。

第六のラツパが鳴り響いた時、ヨハネは御座の前に置かれた祭壇から前に聞いたような声を聞きます^{黙示録8章3、5節}。しかし、今度は、四隅にある祭壇の四つの角から特別に発せられた。イスラエルの地上の幕屋の祭壇は天にある幕屋を手本として造られたもので、祭司は幕屋の祭壇に犠牲の脂肪を常に燃やし続け、青銅の祭壇の上の四つの角に、絶えず祭司の指に付いた血を塗り続けていた^{レビ4章17、18節}。四つの角の内側にある祭壇自体には祭司は絶えることなく火を灯し続けた^{レビ5章12、13節}。地と火はもちろん、罪は火によって裁かれ血によって買い戻されるといふ聖なる要求を絶えず描写していた。もし、罪のない者の血が罪の贖いに流されないなら、有罪の者の血は罪の激しい裁きで流されなくてはなりません。そして、地球はその悲しい全歴史を通して悪者たちのせいでも広範囲な破壊を受けようとしているのです。過去の時代で人々は、憐みを求めて祭壇の角をつかんだが^{「1列王記1章50節」}、今度は復讐する天使（またはキリスト自身でさえあるかもしれない）の裁きを宣告している声が角の中から聞かれるのです。

黙示録9章14節　その声がラツパを持っている第六の御使いに言った。「大河ユーフラテスのほとりにつな

がれている四人の御使いを解き放せ。」

ラツパをもった天使たちは、創造主の御前のすぐそばに立っている天使たちなので、思うに、創造主だけが彼らに命令します。それゆえ、祭壇の角からの声は、実際には、創造主の御子、小羊の声です。御子は、今なお、世の罪を取り去る働きをしておられるのです。^{「ヨハネによる福音書1章29節」}

ここで私たちにさらに破壊的願望の実行をこれまでとどめられ、拘束されていた四人の御使いが紹介されます。こうしてこれまで彼らの祭壇にいます唯一の方から御前にいる力ある天使への命令は、これら他の反逆した天使たちを解き放つため、こうして彼らは、また長い間待っていた人類への報復に取り掛かることができるのです。しかし、これらは誰でしょうか、また彼らの牢獄が大河ユーフラテスにあるのはなぜでしょうか。これら四人の天使は、大いなる深淵に居るアバドンにとらわれている群れとはつきり異なっており、もう一つ別の悪霊の大群を預かっているように思われます。聖書はこの興味ある問題に関して特別な情報をどこにもほとんど与えていませんが、尚、考える余地があります。

サタンとその御使いたちの創造主のみこころに対する最初の反逆は、創造の第一週が終わって間もなく起こりました。彼らの墮落は、（すでに検討したように）最初に彼らを天から地に投げ出す結果になりました。これら落とされた天使たち（悪魔または悪霊）は数えきれない仲間の三分の一（ヘブル人への手紙12章22節；黙示録12章4、7節）であると言われています。サタンが配置し利用できる数は非常に大きかったし、今なお大きいのです。

けれども、ノアの時代にすべての人類を墮落させるための不幸な企ては、サタンに従った天使たちの重要な部分の戦闘力を失わせた。これら反逆の『神の子たち』^{「創世記6章2節」}はタルタロス（ハデスの下の奈落）に引き渡され、暗やみに閉じ込められ最後の裁きを待っているのです^{「ユダの手紙6章」}。今検討したように、こ

これらの悪霊たちは、第五のラツパの下、五か月の間一時的に鎖を解かれたのかも知れません。そして、創造主の裁き的手段として用いられたのです。

しかし、ここに他の群れがあり、ユーフラテス川に居る彼らの四人の長に結び付いた奇妙な所すべてに二億の強い一群です。彼らの一時的開放は、アバドンとその一団の解放より後であり、したがって、彼らは反逆し監禁されていたのかもしれませんが。

原初のユーフラテスは、エデンの園から出ていて「創世記2章10～14節」、それは明らかに降雨によるのではなくて、圧縮された水が溜められていた広大な地下の貯水所からで、地表から深くにある地球内部の熱によって制御され活気づけられて、流れ出て来たのです。

けれども、ノアの洪水の時、この『大いなる淵』は破れ「創世記7章11節」、地球の初期の地形は完全に変えられたのです「Ⅱペテロの手紙3章6節」。

洪水後まったく新しい大陸が現れ、そして、広大な大気に開かれた海洋の貯水所がユーフラテスが原初に流れ出していた地価の貯水所にとつてかわった。しかし、今や、新しいユーフラテス川がその源をアララテ山の斜面の高い所に形成された。その水はアララテ山の山頂に間もなく形成される永久氷帽（山頂などを覆う万年雪）にある水に由来しています。この川は斜面を曲がりくねって下降し、メソポタミヤの大平原にその姉妹のチグリス河と共に現れ出、最後には新しい海に流れ込みます。

ノアの子孫がまもなく移住したのがここで「創世記11章2節」あった。その地帯は、彼らが不毛の洪水後に見出した地で、明らかにエデンにある彼らの父祖の地に最もよく似ていた。彼らは二つのメソポタミヤにある川をそれらが似ていたエデンの園にあった川の記念にユーフラテスとチグリスと名付けた。そして、そこに

力強いニムロデの指揮の下で大都市バビロンの建設に取り掛かった「創世記10章8～10節」。

原初のユーフラテス近くで発達したカインの文明がまもなく甚だしく腐敗したように、新ユーフラテス川流域に育ったニムロデの文明（初期のシメリヤまたはシナル）もまた腐敗した。サタンがエデンの園に入ったように、今度はバベルに入った。そして、もう一度人類の広範な道徳的腐敗をその後すぐに起こしたのです。大きな神殿の「天に届く」「創世記11章4節」塔が建造された。そこに人々は天の星ぼしを礼拝するために集まれるはずでした。確かに、そこから始まった占星術、汎神論、多神論、偶像礼拝、心霊術、自然崇拜の哲学を含む広大な異教宗教の複合体が、それ以降すべての民族を墮落させたのです。サタンは彼に属する反逆の「天の軍勢たち」を通して、ニムロデとその代理となんとか連絡を取り合った。そして、創造主に反逆する他の大きい働きを合理化し活性化する彼らに魔術的秘密を教えたのです。バベルの塔の頂上にある彼らの神殿の祭壇は、星々や星座を表している大いなる天のしるしで飾られていた。そして、順次、それらは事実、まもなく礼拝し従い始める悪霊の軍勢以外の何物でもない異教の神々や女神たちと同じとされたのです。この宗教哲学の腐敗した行為の無宗教的進化論との複合体は、結局、世界のすべての宗教に運び込まれた。そして、それ以来、人間思考を支配しているのです。そのため、サタンの軍勢は、ノアの時代に彼らがしていたように、人間の思考と行為の支配権をほぼ掌握しているのです。

ニムロデの反逆の結果として聖なる裁きがほかにありました。言語が乱され、家族は皆すべて離散しました。ついに、ある家族はバベルとアララテから移動し、最も遠い地域に着きました「創世記11章9節」。このことに関しては何も語られていませんが、洪水前の天使たちを創造主が監禁したのと同じように、少なくともこの反逆をそそのかしたサタンにつく天使の軍隊を創造主がまた罰することもありそうです。

これが、ここでユーフラテス川に繋がれていると示されているこれら悪霊の群れの起源かもしれません。もちろん、確かではありません。この古代の川はノアの洪水前の初期の反逆の場合にあったように、悪魔と彼らに着く天使によって最近の人類に広く広がっている墮落の現場であった。

彼らが反逆したまさにその現場ユウフラテスに彼らを閉じ込めたのは、たぶん非常に適切なことでしょう。勿論、彼らがそこにどのように繋がれているかを正確には説明出来ません。控え目に言っても、特に肉体から分離した霊が、流れている川に四千年も鎖につながれる方法は分かりません。ことによると、それに近い答えは、有史以来バビロンとその住民が創造主と主の民に絶えず敵対したことの説明に役立つかもしれませんが、この仮説は、彼らがどんなふうにもそこに縛られているかという問題とは関係がありません。確かに、創造主はこの必要に立派に対処でき、実に適切な何か効果的な方法で彼らを縛ることができるのです。

勿論、ほかに興味深い説明も可能です。おそらく、ここで述べられているユーフラテスは、バビロンにあるユーフラテスと言うより洪水前のユーフラテスだということです。ほとんど可能性がないと思われませんが、地球の深くに、それはエデンの園の最初の流れをコントロールしていた地下の貯水所が残っているというものです。これらの泉（出口の導管を管理していた）が洪水を生じさせるために爆発した時、又は、少なくとも洪水後に地球の地殻を再調整して安定状態にする時に、これらの空洞は張り裂けたけれども、最初のエデンの園から流れでた川の源がまだ無傷かもしれないのです。大洪水の時期の大きな圧力の下でも決して潰れないように創造の時に創造主によって非常に安全にデザインされていたのかも知れません。

もしこれが当たっている場合、これらの墮落天使のための適切な牢が準備されていたことでしょう。その時は、彼らがユーフラテスに繋がれているというのは文字通りなはずで、いづれにしても、彼らがどこに居ようと、創造主につく聖なる天使がラッパで彼らを呼び出す時、彼らの四人の長によって呼び出されるのです。

黙示録9章15節　すると、定められた時、日、月、年のために用意されていた四人の御使いが、人類の三分の一を殺すために解き放された。

前の災害はただの五か月だけで終わっていました。それによって攻撃された人々はその災害は、際限なく続くと思われたに違いありませんが、僅か五か月だけで終わってしまいました。しかし、今回は、ちょうど十三か月にわたって続きます。原文の「時」にある定冠詞は、その時はずっと前に設定されていたことを示し、そして牢獄に入れられた霊たちは解き放たれる時をイライラして人類に少しでも復讐する機会を長い間待っていたのです。

前のラッパの裁きで、人々は死を求めたが死ぬことができなかった。今回の裁きの下では、人々は死から逃れることはほとんどできません。全人類の男も女も地上に居るその三分の一が、恐らく10億人以上がこの恐ろしい軍勢に殺されるでしょう。

第五と第六のラッパの災害は、一八か月全体に及びます。最初の四つのラッパの裁きは、六つの封印の裁きと合わせて、ほぼ二年にわたっており、それゆえ、第六のラッパで、大患難期の真ん中に世界の人々を連れて行くこと推定されます。

黙示録9章16節　騎兵の軍勢の数は二億であった。私はその数を聞いた。

四人の繋がれた天使と共に解放された途方もない群れは、ヨハネには多くて数えきれませんでした。しかし、誰か恐らく祭壇からの声が、その数は二億であり、人の歴史でかつて集められたことのない程大きい敵でアメリカ合衆国の全人口に匹敵する数だと告げた。

けれども、その意味に対して出版された圧倒的に多くの解釈にもかかわらず、これは人の騎馬軍ではありません。地上の軍隊をこれくらい集められるかもしれないと言っても、続く記述は合理的にどのような人とも同じと見ることはできません。

黙示録9章17節　私が幻の中で見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであった。騎兵は、火のような赤くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は、ししの頭のように、口からは火と煙と硫黄とが出ていた。

ヨハネが見た大群は、馬と騎手がほとんど果てしなく地上を横切つて歩を進めている驚くべき騎兵隊のように現われました。欽定訳聖書の訳者は、それを「幻」と呼んでいるが、同じ言葉は「光景」とも訳されています。それは黙示録の他の時にただ一度用いられていて、「…エメラルドのように見える」〔黙示録4章3節〕です。それは、必ずしも幻ではなく、普通見えていない光景を意味しているだけです。

前のラッパでのサソリイナゴのように、これは、悪霊が住み着いた悪夢のような動物の悪霊に憑つかれた大軍なのです。彼らは今まで、四人の悪しき大君主とともにユーフラテスに繋がれていたのです。これらの恐ろしい馬と騎手は悪霊に憑かれた生き物であり、彼らがそれによって人類に加える事の出来る彼らの身体は、創造主によって恐ろしい裁きのために特別に創造されたものです。彼らの身体は、真の肉体であり、物

質の火と硫黄を生じる事ができ、彼らが攻撃する人々の死をもたらすのです。このことは彼らの身体が牢から汚れた霊が解放された丁度その時、特別に創造されることを示唆しており、それから昇ってくる霊たちによってすぐ乗っ取られます。

大暴風のように、彼らは彼らが閉じ込められていた牢から広がり、そして、人類に対する報復のため地上を激しく動き回ります。彼らは悲惨な環境に陥つたのは人類によると見做していたのです。彼らはかつてのように、最早、人を虜にするためにある種の人の肉体に取り付くように強制されないで、今や、彼らは人を滅ぼすために新しく手に入れたからだを用いる事が出来るのです。

彼らの身体はなんと恐ろしいことでしょう！13カ月それらの身体を用いる悪霊たちのためにふさわしく設計されており、彼らの役割を務め終わると、彼ら自身、最後に破壊されます。

彼らは馬ではなくて、彼らの身体は馬に似ているのです。そして、彼らの頭は獅子の頭のようにだと言われています。恐らく、彼らは寓話にあるケンタウルス（ギリシャ神話のケンタウロス…上半身は人間下半身は馬のかたちをした怪物）のようです。人の頭と上半身を持つ馬、上半身は馬に乗っている人々のような外観で、彼らが乗りまわしている馬はまた彼ら自身の身体です。この場合、頭は人と言うより獅子に似ていて、馬人間と記述する以外に書きようがないのです。獅子に似た頭は騎手の頂上にあつて、騎手の身体は馬の身体のかなかに没入していることを暗に示しています。

その外観がなんであろうと怖い光景です。群をなして前進する彼らを見つめる時、人の心に筆舌につくせない恐怖を感じさせたに違いありません。その生き物は彼らの外観と同じように恐ろしいので、この恐怖は当然のことです。ヒヤシンス石（堅い宝石の原石、おそらくジルコン）の胸当ての鎧を着ていて、彼らは燃

える火と硫黄（通常硫黄と訳されているが、そのへブル人への手紙語の語源はノアの箱舟に用いられたゴフェルの木からの樹脂に関係しており、そのギリシャ語形は「聖なる外観」を意味する語源に由来しているようです）のようには見えません。明らかに、硫黄は自然にある物質と考えられ、それが燃えているのはこのような外典所がどこかはつきりしません。その正確な組成は分かりません。獅子の顔は実際に火と煙と吐き気を催させる硫黄を吐き出し、あたかも地獄の香りそのもののようです。

文字通りの地獄の存在を否定する懐疑論者は、人々がここ地球に直ちに自分自身の地獄をつくるというもつともらしい説明にしばしば同意します。彼らはこの様な詭弁がどうして文字通り本当になるかその方法がよく分からない。二億の生き物で、皆、火と硫黄を装備し、地上を襲い、地獄の火が、実際に地球を包み込んでしまっているかのように出現します。

確かに、このすべては、空想的で不可能と思われる、したがって、注釈者たちはこれらの執念深い馬どもに種々様々の比喩的意味を考案してきました。しかし、これらは地上に初めて見られた火を吐きだす動物ではありません。古代の諸民族はどこでも火を吐き出す竜を描いています。彼らは以前地上に居たのです。そして、聖書は少なくともレヴヤタンとよばれたこのような生き物を記載しています〔ヨブ記41章19、21節〕。これらのドラゴンは実際に恐竜であったことを示す多くの証拠があります。そして、化石の証拠は、少なくとも幾つかの恐竜にある構造を示し、炎を出す化学薬品を混合する部屋として役立ち、火と煙のかたちで放出できたことを証明しているのです。ヨハネは、彼が実際に見たことをただ書いているのです。

黙示録9章18節 これらの三つの災害、すなわち、彼らの口から出ている火と煙と硫黄とのために、人類

の三分の一は殺された。

これら生き物の獅子のような頭部についている吠えたける口から出る致命的な呼吸にある三つの災害すべて死を招きます。人々は炎で焼き尽くされ、煙で息をつまらせ、硫黄のガスによって毒殺されます。イナゴの五か月の恐怖から回復できない全世界の諸国にいる慌てふためいた住民は、狂乱状態になって隠れ場を求めて逃げまどい、多くの人は殺されます。

確かに色々な武器が彼らに立ち向かう時、ある程度の動物たちは殺されるでしょう。その光景は、科学小説の作家やハリウッド映画の大立者が夢見た怪物映画のようですが、現実のことです。結局、政府と軍の指導者は、これら侵入者と戦うために恐らく組織化されます。十三か月の恐ろしい月日の後、最後に首尾よく彼らを滅ぼします。ヒヤシンス（赤みがかったオレンジ色）の胸当は特に防弾のためであり、しかも、彼らを撃退するため多くの強力な武器を用います。ひとたび動物が死ぬと、彼らの死体は地の表面を汚し景観を損ないます。身体を占有していた悪霊たちは、再び身体をもたない状態になります。それから、彼らは地獄の或る穴に群れをなして帰るのか、患難期の残りの時を肉体から分離した霊として地球をさまようことを許されるのでしょうか、いずれであるかは示されていません。

しかし、この事件に伴って残された人の大量殺戮はほとんど信じられない程です。その時の全世界の人口の三分の一が殺されます。このことは、今までの裁きすべてで、おおよそ十二億の人々が殺されたこと、そして馬人間一人当たり平均6人が殺されたことを意味します。

黙示録9章19節 馬の力はその口とその尾とにあって、その尾は蛇のようであり、それに頭があって、そ

の頭で書を加えるのである。

しかし、この奇怪な動物にはもう一つ驚くべき特徴がありました。そのことをヨハネが後から思い出したかのように述べています。口でばかりでなく尾でも死んでいた。彼らに先立って出現した悪霊付きのサソリのように、彼らは切りつける尾で同じように肉体に苦痛を与える事が出来ます。けれども、この場合ヨハネは彼らがサソリではなく蛇に、虫の針ではなく蛇の毒牙を持つ蛇に例えています。このような動物がかつて観察されたことはない（有史以来このようなことがなかったのは人類にとって良いことです）が、全能の創造主が彼らを造り出すことが出来ないということを含く意味していいのです。

さらに、これらの動物は、彼らが人を恐れておののくというノアに与えた指示「創世記9章2節」の範疇にはなかった。なぜなら、彼らはノアの時代には存在していなかった。裁きの目的そのもののために新たに創造され、邪悪な霊たちにより活力を与えられたこれらの動物は、間もなく人の恐れと酷い怯えの対象になります。

しかし、最後にこの災害は終わります（明らかに七年の患難期のほぼ中間点）。そして、生き残った人類の三分の二はもう一度短い小康状態を楽しむことができます。そして、確かに、人は考えます。すべての他の裁きの頂点にやってきたこのぞつとするような経験と、創造主とサタンの存在に関して疑う余地がないことと、宇宙の戦いの真の意味を考えます。創造主に立ち帰り、膝をかがめて従うように全ての人を駆り立てると考えるはずです。そうでなければ！ 人の利発さと力はもう一度困難を克服し、合理的に説明します。彼らの襲来は止み、今や彼らは安全であったからです。

石の心と石の偶像

黙示録9章20節 これらの災害によって殺されずに残った人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、

この時までには、創造主の二人の証人と一四万4千人のイスラエル人「黙示録7章4〜8節」の証、そして、地に行われた創造主の大きいなる裁きを「イザヤ書26章9節」を通して、すべては恐らく患難期前の聖徒たちが天に召された時「黙示録3章10節、4章1節」置き去りにされた、実に豊富な聖書には述べられていないクリスチャンの文献によって補われても回心していなかったこれらの人々の心は、創造主に対して非常に頑なになっていたので、わずかの例外を除いて、彼らは手の届かない「滅ぼされるべき怒りの器」「ローマ人への手紙9章22節」になっていました。彼らは「神（創造主）の正しいさばきの現れる怒りの日のために神（創造主）の怒りを」「ローマ人への手紙2章5節」彼ら自身のために際限なく蓄え続けてしまった。「神（創造主）は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる」「ローマ人への手紙2章6節」のです。

たとえこのような悔い改めない反逆者の3分の1が、もっとも最近のこの裁きで滅ぼされたとしても、生き残った人々は、かつてなかったほどに創造主に対し頑なになります。事実、彼らはもう公然の悪魔主義者になり、悪霊を礼拝していました。彼らは今までの裁きは創造主からであり「黙示録6章16〜17節」、キリストが天に居られ復活した聖徒たちを伴って地上に帰ってくる準備をしていることを知っていました「黙示録12章12節、13章6節」が、サタンと運命を共にすることに決めており、彼らはサタンと共に天の軍勢をも打ち破れると信じて

いたのです〔黙示録13章4節〕。

そこにはもはや創造主と聖なる天使たちの存在を否定する無神論者もヒューマニストもいません。彼らは、天使たちが空を飛びかけ裁きを宣言するのを見ています〔黙示録8章13節、14章6〜7節〕、なお、創造者としての創造主を永遠に否定し、天使たちや創造主ご自身さえ「永遠に孤立して存在する物質とエネルギーから成る宇宙の進化による産物にすぎない」とサタンと一緒に信じているのです。こうして、彼らはサタンの奇怪な神になれるという自己欺瞞に加担し始めるようになり〔イザヤ書14章12〜14節〕、サタンとその悪魔的階級制度に従って、彼らは自分自身が神々〔創世記3章5節〕のようになると信じ、もはや彼らがしようとしている何事をも妨げることはできないのです〔創世記11章6節、ローマ人への手紙3章18節〕。

近代の進化論的ヒューマニズム（人間中心主義）の非科学的詭弁で長い間自分をだましてきた西洋文明の詭弁を弄する人々は、古代の進化論的多神教に立つ汎神論を、さらに満足のいく状態に速やかに戻そうとして、「空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に」〔エペソ人への手紙2章2節〕したがって、地球と空中に働く悪魔のような力を崇めるのです。アジアやアフリカの文化を熱心に愛している多くの人々にとってこれは、もつとも容易に受け入れる事が出来るのです。なぜなら、これらの人々は既に汎神論的かアニミズム的（精霊崇拜的な物活論）または両者を兼ね備えているのですから。

聖徒たちのためにキリストが再臨されるに先立つ多くの年月、西洋文明においてさえ、オカルト、占星術、降霊術、と類似した「悪魔の教義」〔エテモテへの手紙4章1節、エテモテへの手紙3章13節〕が復興し、そして、世界中どこにいる人々の心をも大規模な反逆の最後の日に、偶像崇拜に戻る準備をします。それから、大きな礼拝センターが建立されるでしょう。そこには、恐らく邪悪な者の支配と権力〔エペソ人への手紙2章6節、エヨハネの手紙5章

19節〕によって管理された様々な宇宙と地上の力と過程を描いている現代芸術の奇妙な像があり、また実際に彼らが描き描写するこれらの悪しき霊を礼拝する人々によって、これらは礼拝の対象となるでしょう。金と銀、青銅と石、そして木の偶像礼拝は、勿論悪霊を礼拝するのと同じなのです〔コリント人への手紙10章20節〕。

偶像自体は何物でもなく、それはいのちのない死んだ者に過ぎません。このようなものが、信奉者の個人的必要を満たせると信じるのは馬鹿げています。けれども、どこの国の民も皆、その民の歴史の夜明けから偶像礼拝をしてきているのです。現代の哲学者と科学者は、知的傲慢さで、その上さらに馬鹿げた妄想を信じ、仮想上の原初の形のない状態にあった生命のない架空の物質が進化して、宇宙の複雑な系（命のある組織さえ）にすべてを進化させたと信じているのです。「初めに水素が・・・」と彼らは本当に真面目に言います。どうかして、永遠の物質から銀河と惑星、植物と動物、人と天使が進化してきたのです。

なんと馬鹿げたことか！創造主の形に創造された聡明な人が、いのちの無い物を信ずることが出来るのでしょうか。「彼らは木に向かつては、『あなたは私の父』、石に向かつては、『あなたは私を生んだ。』と言っている。」「〔エレミヤ書2章27節〕

地上に来るこれらの恐るべき日に彼らはもう一度、進化論に立つヒューマニズムも進化論的超ヒューマニズムも（物質でも、人でも、天使でもない）彼らを救い出すことが出来ないのを見出すでしょう。「あなたが自分のために造った神々はどこに居るのか。あなたが災にあう時、もし彼らがあなたを救えるなら、立つてもらおうがよい。」「〔エレミヤ書28章28節〕」「人々があなたがたに、『霊媒や、さえずり、ささやく口寄せに尋ねよ。』と言うとき、民は自分の創造主に尋ねなければならないのではないか。」「〔イザヤ書8章9節〕しかし、彼らはそうしない。

黙示録9章21節　その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかった。

ここに理由があります。なぜ人は創造主よりも闇の力に仕えることを強いるのか。「悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに來ない。」[ヨハネによる福音書3章20節]。パウロは異邦人について「異邦人がむなししい心で歩んでいる」[エペソ人への手紙4章17節]と言っています。そして、「彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神（創造主）のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」[エペソ人への手紙4章18-19節]と言います。

偶像崇拜によって悪霊礼拝をしている人々は、また人殺しで、麻薬使用者、性的不品行者で、盗人であり、彼らは変わることを望みません。

患難期の初め赤い馬が出てきた時以來黙示録6章4節、地上に暴力行為と無秩序が続いていました。これに乗っている者は「地上から平和を奪い去り人々が互いに殺し合うようになる」ために遣わされたのです。法律と秩序を維持する力は、いくら良く見ても無効になっており、人々は望むままに自由に奪い盗み殺した、そして、彼らは、このような不法行為を最大限に利用した。性の自由に関する宗教的制限は同様に取り除かれており、したがって、姦通、密通、熱狂したお祭り騒ぎ、男の同性愛（男色）、女の同性愛（レスビアン）そしてゆがんだあらゆる形の性的倒錯はごく普通のことになっていました。

これら邪悪のすべての形と、彼らが引き起こす良心の心の痛みを鈍くする事に関連して、麻薬使用による甚だしい感情の異常な高まりがあるのです。「まじない」と訳されたギリシヤ語 *pharmakeia* は、基本的に「睡眠薬を入れる」ことを意味します。それは英語の *pharmacy* (薬局) や *pharmaceutical* (調剤) の語源です。

ギリシヤ語はまた「魔術」とも訳されます。(ガラテヤ人への手紙5章20節にまさに偶像礼拝から妬みに至る長い肉欲の罪の一覧表が挿入されています。)

知覚をマヒさせ幻覚を起こさせる麻薬は、長い年月魔術と魔法に深く関わってきて、それらの薬物を摂取する者に奇妙な幻と幻覚症状を起こさせ、その依頼人を操る神託として利用する事が出来るのです。もっと重要なことは、麻薬の使用者から精神のコントロールを取り去り、悪霊が彼らを容易に支配出来るようにし、悪霊たちは、麻薬を通して墮落させるためのどんな導きでも伝えることが出来るのです。

聖書はこのような訳で、あらゆるこの種の神秘的礼拝や協議に対して繰り返し警告しています。近年の、麻薬使用の著しい急増はオカルティズム（占星術、魔術、降神術、超自然的な瞑想を伴うヨガ、と種々の西洋とアフリカの宗教）の増大に伴っていることは驚きです。

患難期の恐るべき日々の間、法と秩序の破壊は薬物（麻薬）使用にもはや何の束縛もないことを意味します。さらに、地に來る恐るべき裁きは、現実逃避の方法として多くの人を麻薬に駆り立てます。地の商人はそこには多くの利益が約束されているので喜んで協力します。この同じ言葉が黙示録18章23節に「おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。」と、これらの国際の不当利得者の売り込み活動と関連して用いられています。

サタンは「全世界を惑わす」[黙示録12章19節]者なので、サタンは多くの人の心に彼の惑わしを挿入する手段として、これらの麻薬を用いることは明らかです。商人は気にしません。すなわち、彼らの利益は増大し、彼らは人のいのちさえ売り買ひします[黙示録18章13節]。これらの人々の殺人者や盗人たちの多くは（特に、前例のない飢饉と欠乏の時期を通して）、麻薬を手に入れるために払わなければならない結果である可能性があ

り、また性的交渉の多くが麻薬を手に入れるためになされます。

ヨハネが私たちのために書いた筋書きは、ぞつとさせるものです。自分の永遠の未来に関して決めていない航路にある人がいるなら、選択の意味でこの瞑想の機会は、彼を助けるかも知れません。カルバリの十字架で表されたキリストの慈悲深い愛も、彼を悔い改めに導きくことは出来ないとしたら、この言い表すことのできない患難の時、キリストの来たるべき怒りの実現が彼に割当たられている全てかも知れません。「疑いをいだく人々があれば、彼らをあわれみ、火の中から引き出して救ってやりなさい。」〔ユダの手紙22章23節〕。「生ける創造主のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである。」〔ヘブル人への手紙10章31節〕。